校長室だより

令和７年　６月２７日（金）
第　１３　号
十日町市立中条中学校校長室

テストの後、保護者は？

中学校では学習の定着状況を把握するために、各種テストが行われます。生徒も保護者も点数が気になるのは当然です。私たち教職員も同様です。

しかし、「できた、できない」だけを見ることがテストの目的ではありません。点数だけに一喜一憂してはいないでしょうか。もちろん点数は一つに大きな指標です。しかし、テストの目的は、何が身に付いていて、教師側としては何を重点的に指導したらいいか、生徒側でも自分の弱点をつかみ、学習方法を改善することが大切なのです。校長室だより４号の「ゴールをイメージする」にも通じます。

校長室だより第 10 号では、非認知能力を育てるほめ方として「結果でなく努力をほめる」ことの効果について紹介しました。改めて考えると、「努力をほめる」ためには、子ども（生徒）の様子をよく観察していないとできませんよね。保護者の皆さまにしてみると、子どもを見ていたいとは思うけど、「忙しくて見ていられない」とか「中学生なんだから、勉強は本人に任せている」とおっしゃる方もおられると思います。でもテストが返ってきたときは大きなチャンスではないかと思うのです。そこでの保護者の対応がその後の生徒のモチベーションにつながる気がします。

岸圭介先生の「学力は『ごめんなさい』にあらわれる」（ちくまプリマー新書）という本に出合いました。岸先生は、小学校での国語教育を研究されています。その本の内容を引用して考えてみたいと思います。

さて、テスト後にご家庭でこんな会話はありませんか。漢字テストで 70 点をとったＡくん。友達のＢくんは 90 点でした。（問題数 10 問、１問 10 点と考えてください。）

> 母「漢字テスト返ってきているよね。70 点？３問も間違っているの」「Ｂくんはどうだったの。ほかの人は」「勉強したって言ったじゃない。なんで３問も間違えるの」「とにかく練習しなさい」　※Ｂくんは 90 点取っています。

こう言われたＡくん。学習意欲は高まるでしょうか。Ａくんは、お母さんの言葉にすっかり自信をなくしてしまうのではないかと思うのです。

この場合、Ａくんの３問の間違いは、「休む」を「体む」、「先生」を「生先」、「百」を「百」の中の横棒をもう一本書いて二本の横棒にしたという間違いでした。一方、Ｂくんは、１問「空」が書けず、空欄のままでした。

確かに 90 点と 70 点で理解度に違いがあるかもしれませんが、Ａくんの間違い方は悪くありません。次につながる可能性が大きいからです。Ｂくんは１問全く書けませんでした。点数は良くても覚え方としてはどうだったか、考える必要がありそうです。

> 私はテストでの空欄や未記入はできるだけさせたくないと考えます。自分の頭の中を巡らせて、何かしら答えさせたいのです。授業の中でも「分かりません」というのは簡単です。「分かりません」と言う時は、多くの場合そこで思考が止まり、あきらめてしまいます。分からないなりに答えを出す。そこで、自分の学習したことを振り返ることが大切なのです。Ｂくんであれば、思いつくものを書いてみることが必要だと思うのです。（校長より）

私たち教職員も意外と点数だけで判断してしまいがちです。もっとひどいのは「この点数じゃダメでしょ。もっと勉強しなさい」と怒られて終わってしまう場合です。生徒は次にどうしたらいいか分からないのです。このように次への向かうヒントもなく、怒られることを繰り返していれば、学習意欲が下がるのは当然です。

Ａくんは内心こう思っているかもしれません。「次は必ず書けるはずなんだけど。」

岸先生はこの場面を分析しています。

> 学習の到達度からいうと、Ａくんは確かに３問、間違えています。しかし、間違え方は悪くないのです。「休む」や「百」は横棒を余計につけてしまいました。小さな子どもですから、似たような字は混同して覚えてしまっていることもあります。場合によっては、はじめから字を間違えていたかもしれません。「休」と書いたつもりが、いきおい余って思わず「体」と書いてしまった可能性があります。「先生」も両方の漢字はできています。無意識に書いてしまったかもしれません。単純に「漢字学習をおろそかにしていた」と決めつけることは難しいのです。
>
> Ａくんの事例の場合、実態をつかんでいないのは、どう考えてもお母さんですよね。子どもはただでさえ、くらべられるのをいやがるものです。ましてや、点数以外の面に正しく目を向ければ、努力を重ねていたのはＡくんかもしれないのですから。Ａくんは決して書けないわけでなかったのです。
>
> でも実態を見ることなく、感じたままに話をしたのが原因で、お母さんとＡくんとの心心理的な距離も生まれてしまっています。こうして教育熱心な親が子どもの学習意欲をうばうという構図が完成するのです。

私は「なるほど」と思いました。私たち教職員も個々の生徒の間違いを把握しながら、個々の生徒にどうアドバイスするかを考えることが大切だと改めて思います。

岸先生は、保護者の適切な声掛けの例を挙げています。

> 「70 点だったのかぁ、惜しかったね。間違えには必ず原因があるよ。こういうときは、どうして間違えたのか振り返ることが大切だよ。少し考えてみて分かったら教えてくれる？」
>
> 「漢字は分かっていたのに、間違えてしまうのはもったいないね。覚えていてもうっかり間違えてしまうことはあるよね。じゃあ、これからどうやって見直しをすればいいかな。」

このように言うと子どもはどう感じるでしょうか。悪い点数を見ると興奮してしまい、なかなかこうは言えないかもしれません。そこをグッと堪えて、間違いに寄り添ってみたら、そこで生徒のモチベーションが高まるのではないかと思うのです。校長室だより第 10 号で紹介した魔法の言葉「惜しい」がこの会話に入っていますよね。

これは、小学校低学年の事例なので、「中学生の学習内容を見てあげることはできない。私には無理だ。間違いを一緒に考えられない。」と言われる方もいらっしゃるかもしれません。私としては、正しい答えを導けなくても少しの時間一緒に向き合うことでいいのではないかと考えます。子どもの思考過程、つまりどう考えてその間違いを導いてしまったのかを少しでも見つめるだけでいいと思います。家庭でその振り返りをした上で登校し、学校で教師や友達に聞けば必ず良い方向に行くはずです。

生徒は学校では、本当に先生方の様子をよく見ています。時々感心してしまいます。同様に家庭では保護者の皆さまの様子をよく見ているはずです。保護者が点数だけにこだわるのではなく、一緒に考える姿勢を持てば、自然と子どもの学習意欲は一層高まると感じます。

引用　「学力は『ごめんなさい』にあらわれる」　岸圭介　著　ちくまプリマ―新書